

自由における対話

シェリング『自由論』を読むために

平尾 昌 宏

前 書 き

本稿は、一八〇九年に公刊されたシェリングの『人間的自由の本質及びそれに関わる諸対象の哲学的探究』（以下『自由論』と略記）をどう読むかという、極めて基本的な問題について考えようとするものである。そのためここでは『自由論』の内実についての解釈は行わない。ただ、本稿のような解釈以前の考察は、少なくとも一つの試論として、必要なものではないかと考える。

1 シェリング哲学における『自由論』

『自由論』をシェリングの著作中で最も優れたものとする論者は多い。西谷は『自由論』の訳者緒言で、「シェリングは幾多の輝かしい思想の峯を越えて、この書に至って最も高い頂きに達した」と評し、同時に、『自由論』は「哲学的文献全体のうち最も深く考えられたものの一つ」だとするフィッシャーの評言をも引いている。ハイデガーも「この論文はシェリングの最も偉大な業績であり、同時に、ドイツ哲学の、したがって西洋哲学の、最も深遠な著作の一つである」とまで評価している。^③

おそらく幾らでも掲げられるだろうこうした評価の突端に位置すると言えるのは、遑れば、この著作を「深い、思弁的なもの」とするヘーゲ

ルの『哲学史講義』における評言であろう。^④しかし、ヘーゲルは同時に、「この著作はそれだけで単独で（*einzel für sich*）あり、哲学において個々のものを何ら展開することはないだろう」と言う。哲学の歴史全体における自らの位置について自覚的であったヘーゲルが、同じく自覚的なシェリングに向かって述べた言葉は、当時の思想状況の一端を示している点で興味深いとともに、一面の真実を突いている。実際、『自由論』はシェリング自身の編集による著作集の第一巻における書き下ろしとして刊行されたものの、著作集の計画はこの一巻で途絶し、以降シェリングは長い沈黙に入る。しかし、こうした『自由論』の孤立は、上に掲げた賛辞とも矛盾することなく両立し得る。それはシェリング自身の哲学の歩みにおいて、哲学史の流れにおいて、高ければ高いだけ、余計に孤峯なのであると。^⑤

しかしながら、研究の進展に従って、こうした見方は修正されざるを得なくなってきた。後期哲学の重要性が認められることによってシェリング哲学についての見方は劇的に変化し、特に『自由論』との関わりで言えば、直接後続する時期に執筆された膨大な「ヴェルタアルター」草稿の掘り起こしの結果、『自由論』が、少なくともシェリング自身の歩みの中では決して孤立した著作ではなく、むしろ、氷山の一角とも言えるものであると考えられるようになった。この点でとりわけ功績あったフアマンズは、『自由論』期を含め、一八〇六年から一八二一年まで

を「ヴェルトアルターの哲学」として総括し、『自由論』と『自由論』以降とを結び付けることに努力を傾注している。^⑦『自由論』は終わりでなく、「将来の後期哲学を模索するその開始を示すものなのだ」とテイエットも言う。^⑧「ハイデガーは彼の明白な独創性にもかかわらず、三〇年前になお支配していたのと同じ立場に依存している」。

こうした研究の趨勢は現在も進行中である。刊行中のシェリング全集批判版や、新たな資料の発見もそれを加速するだろう。^⑨しかし、ここには疑問も生じて来る。単純化して言えば、こうした研究の流れは、『自由論』の意義を見失わせる危険に繋がるのではないか、ということである。^⑩『自由論』がシェリングの他のテキストとの密接で複雑な関連の上に成立していることは明らかで、この点は否定されるべきではない。『自由論』の最終節で予告されている後続の論考とは、即ち「ヴェルトアルター」を指すと考えるべきであろう^⑪、内容に関して単純に見ても、「戦いのないところ、生命はない」(S. 37, VII, 400)という『自由論』の印象的なフレーズは、後の「シュットガルト私講義」(VII, 435)や「ヴェルトアルター」草稿(VII, 219)にも響いており、前者における「根拠と実存」や「無底」といった基本概念に相応する表現も後者には見出せる。しかし、それによって、シェリング自身の手で刊行された一個の著作の独立性を奪ってしまう必要までではない。例えば、「無底」の概念に相当する表現を「私講義」や「ヴェルトアルター」から抽出したフアムスに^⑬対して、辻村は「それらの中には確かに該当すると思われる表現と明白に誤りと思われる表現とが雑然と列挙されている」ことを指摘し、「フルマンスの前掲書は……精神史的に考察したものとしては、甚だ教えるところの多い優れた労作であると思われるが、シェリングの思想の中核、就中『自由論』における「無底」に関する彼の見解の如きは、内容的には極めて貧困であり、哲学的に何の開示をも与えない」

と手厳しく批判している。^⑭

『自由論』は疑いもなく高峯であり、孤立していないとしても自立したテキストである。古代・中世ならいざ知らず、近代において、書かれたものが公刊されるか否かは決定的な意味を持つ。その意味では、例えば「ヴェルトアルター」という著作は存在しない。無論、それが未完かつ未刊でありながら重要なテキストであることに変わりはない。しかし、だとしても、『自由論』をこの形で公刊することに踏み切ったのも、「ヴェルトアルター」を公刊しなかったのもシェリング自身であって、その決断は重い。

その『自由論』は「挫折」した試みではないか、したがって、「ヴェルトアルター」によつて補われるべきであつたのではないか、という反論は可能である^⑮。しかし、著作において与えられている解決を「成功」と見なすか「失敗」と見なすかは、「読む」ことの後でなされるべきであつて、今の段階のわれわれのなすべきことではない。まして、『自由論』に「挫折」や「不十分さ」を見るとしても、外部からそのための判断基準を、たとえそれがシェリング自身のものであつたとしても持ち込むのだとすれば、本末転倒以外の何ものでもないであつて。

われわれはそれが公刊され、かつ優れた著作であつたが故に、公刊されなかつた草稿にも興味を持つのであつて、逆ではない。それは高い峯であるが故に広い裾野を持つのである。埋もれがちであつた草稿の資料価値にのみ興味を集中することは、それ自体歴史家としての仕事には相応しても、哲学からは遠い。ただ念のために言えば、われわれは、『自由論』を読むために他の資料を用いること自体に否定的であるのではない。裾野だけに留まることによつて、あるいは他の峯らしきものを見ることによつて、『自由論』の高さを見誤ることに危惧を抱くだけである。

更に言えば、その裾野は、時期的にそれ以降の思索に及ぶばかりでは

なく、以前の歩みにも拡がっているはずである。『自由論』初出の際の著作集には、『哲学の原理としての自我について』（以下『自我論』）を始めとする初期論文が同時収録されている以上、『自由論』とそれらの論文にシェリング自身が連続性を認めていたことは明らかである。また例えば、『自由論』における「根拠と実存」の区別は、シェリング自身が主張するように（\$. 12. VII, 357）一八〇一年の『私の哲学体系の叙述』（以下『叙述』）や、あるいは「重力と光」という形で自然哲学期から既に見られるものである。時期的に直近の著作『哲学と宗教』との関係も、当然考察されねばならない。

われわれの基本的な視点は、『自由論』を独立した著作として見なすことにある。だが、繰り返し返すなら、それは『自由論』以外のシェリングの著作、草稿を無視すべきだと主張することには繋がらない。むしろ、他のテキストとの対比は、『自由論』の特徴を浮き彫りにすることに寄与するだろう。しかし、『自由論』とこれ以前の思索との関係についての研究は、両者間の非連続を指摘することが多いため、『自由論』の独立性を損なうことは少ない。それに対して、『自由論』とそれ以降の思索との関係の研究は、『自由論』にとって慎重に考えられなければならないことは指摘しておかなければならない。

2 同時代思想における『自由論』

ブッフハイムは『自由論』の最新刊本への序文において、「根拠と実存」に集約される神の内的な二元性の起源を丁寧に跡付けている。それは初期の思索との関係から『自由論』を特徴付けるものであると同時に、更にまた考えるべきコンテクストを提供するものでもある。なぜなら、ブッフハイムはこの概念の定式化の過程において、ペーメやエッティン

ガーの影響とともに、とりわけてもヤコービとの関係が重要であることを強調しているからである。

歴史的な経過を見ても、ヤコービによって引き起こされた汎神論争がドイツ思想史にとって大きな意味を持ったことは否定し難いし、この間にヤコービのいわゆる『スピノザ書簡』が果たした役割は大きい。シェリングを含め、これを通してスピノザ哲学に対する興味をかき立てられた者は多い。だが、従来この点が指摘されることはあつても、ヤコービの存在自体はそれほど重視されなかった。彼の意図はスピノザ批判であり、それがスピノザ復権に手を貸したことは、いわば皮肉な結果であつたからである。ヤコービは媒介としての役割を指摘されても、思想史の周辺に留められてきた。

しかし、シェリングに視点を戻せば、ヤコービはシェリングとスピノザを結びつけたばかりではなく、スピノザ批判の延長上で、スピノザ主義を受容したシェリングに対しても批判を行い、その影は『自由論』のいわゆる序論部分に明らかである。ヤコービは更なるシェリング批判を展開し（『神的な事物について』一八二一年）、シェリングの反批判を呼び起こす（『神的な事物に関するヤコービ氏の著作に関するシェリングの記念』一八二二年）というように、この一連の経過はヤコービシェリング論争の様相を呈している。『自由論』で最も異様に見える点の一つは、若き日に全く拒絶されていた神の人格性が、この時期に唐突とも言えるような仕方導入され、しかも中心的な役割を与えられるようになったことであろうが、その導入の契機がヤコービの批判（への反動）にあつたとすれば、話は明解になる。

こうしたヤコービの役割は従来から注目されてはきたが、その意味を重く見るのは現在の研究の一つの動向であろう。例えばブリュッゲンや久保は、ヤコービとの関係がシェリングの思想の変化に深い影響を与え

ていると見ている。またペーツも、ヤコービとの関係は部分的なものではなく、かつ、時期的に見ても一八二二年に終わるものではないと主張する。それどころか、「シェリングによる、一八二七／二八年の形式における消極哲学と積極哲学との区別を、一八一／一九年のヤコービによる自然主義批判への解答として説明する」という極めて射程の広く魅力的な議論を提出するのである。^⑦

だが、研究のための新しい視点の提示は、常に相対的な布置を持つ。ヤコービの役割が強調されるのは、今までそうした視点があまりに欠けていたが故にではないか。シェリングにとって目の前に存在したのはヤコービばかりではない。『自由論』で直接言及されているフリードリヒ・シュレーゲルの存在^⑧もあれば、フィヒテ、当然のようにヘーゲルの存在もある。フィヒテについては直接の言及も多く、ヘーゲルについては言及はないものの、シェリングが意識しなかったという方が考えにくい。^⑨つまり、広く考えれば、シェリングにとつてのいわば「ヤコービ問題」とも言えるものは、前節で取り上げたシェリングの思索の流れと『自由論』との関係の問題と並んで、シュレーゲルやヘーゲルといった同時代思潮と『自由論』との関わりの問題に包含し得るものである。

こうして考えてくるなら、『自由論』にとつてのヤコービの重要性は、シュレーゲルやヘーゲルの重要性に劣らないとしても、後者の重要性を消すものであるかどうかは、判断の難しいところである。その焦点をヤコービに置くか、あるいはシュレーゲルに置くか、他の誰に視点を置くかは、研究上の観点によるということになるのであるうか。しかし、もし本当にそうであれば、視点は研究者の数だけ成立することになってしまふ。それこそ相対主義的な事態に陥ってしまうのではないか。無論そうではない。第一にそれぞれの観点は、それ自体で固有の意味を持ち、それぞれに明らかにするところが異なっている。また、例えば当該の研

四

究者の視点が他の視点と矛盾する場合には、より説得的な観点が優位に立つのは当然である。だが、もし他の解釈と矛盾しないとしても、その視点がシェリング自身のテキストに矛盾しているのであれば、そもそも成立し得ないのも当然である。どの視点を採るにせよ、その正否を決定すべきなのはテキストであり、数々の歴史的な事実にテキストを埋めさせるべきではない。

以上われわれは、『自由論』を他との関係において見る二つの視点を批判的に概観してきたが、次には、『自由論』というテキストそのものから考えてみなければならぬ。

3 「形式」の問題

だが、そのために、迂遠なようではあるが、叙述形式の問題を考察の出発点としてみよう。あまり注目されていないが、シェリングは実に多様な叙述形式を採っている。

ざっと見ても、論壇デビュー作である『自我論』（一七九五年）のような論文形式は勿論のこと、同年『独断論と批判主義に関する哲学的書簡』の書簡形式、『自然哲学の最初の体系草案』（一七九九年）などの講義用配布物、『超越論的観念論の体系』のように体系的外観を備えた大著もあり、『叙述』（一八〇一年）の幾何学的叙述形式、『ブルーノ』（一八〇二年）のような対話篇もあれば、翌年の『学問論』の講義形式、自然哲学に関する二つの箴言集（ともに一八〇六年）もある。『エッセンマイヤー宛書簡』（一八一三年）のような文字通りの書簡ですぐに公表されたものの、小説「クララー」（一八一〇年）のような試みもある。ただ、これ以降に残されたのはほとんどが著作の草稿か講義ノートである。

研究者にとってこれらがそれほど問題にならないのは、こうした叙述

の形式は、せいぜい語り方の問題であって、哲学的な思惟と直接関係を持たない二義的なものと考えられ、またそこに一貫したものが見いだされるわけではないからであろう。

しかし、『叙述』に関しては形式は大きな問題になる。シェリングは若い頃、『自我論』序文(J, 138)やヘーゲル宛書簡(一七九五年一月六日付け)で既に「スピノザ風エチカ」に匹敵するものを書くという計画を口にしており、その長年の懸案がいよいよ実現されたのが『叙述』であると見なし得るからである。しかも、『叙述』序文によれば、内容的に最も近いスピノザの『エチカ』を模範としたのだと言つ(NV, 113)。だが、形式は模倣できても内容を模倣することはできない。また、実際に出来上がったものは、形式に関しても『エチカ』よりもむしろヴォルフの量産した教科書に近いものではある。ただし、その後には書かれた二つのアフォリズム論文は、実は、かなり緩い幾何学的形式、あるいは少なくとも演繹的な叙述方式を採っているから、シェリングがこの形式に未練を持っていたことは窺われる。

もう一つ注目に値するのは『ブルーノ』であろう。若い日からプラトンに親しんでいたシェリングが対話編を採用することは自然である。しかしシェリングは、『哲学と宗教』序文(VI, 13-15)に見られるように、対話篇を単なる形式以上のものとして高く評価している。それゆえ、『ブルーノ』の続編もまた対話篇であるはずだったが、外的事情でその完成が許されなかったという。しかしこれも、文学的ないし美的な趣味の問題として、したがって非哲学的なものとして処理されるかもしれない。全体を見渡してみても、結果的にそうなってしまうた形式である講義形式を除くと、シェリングが何らかの意図を持って多くの叙述形式を試みたのは、同一哲学の時期を頂点とするその前後であることであろう。『自由論』にはもはや目立つた形式はなく、それどころか、

これが実質的にシェリング最後の公刊著作となってしまう。

しかし、初期の著作や論文、中でも『自我論』や『哲学的書簡』は一種のアジェンションとして読むことも出来ようし、実際、文中には命令法や呼び掛けが多用されている。それは形式とは言えないまでも、そこには固有の文体や書き振りがあふれている。その意味では、例えば「ヴェルトアルター」の文体に叙事詩・神話の趣を見出すこともできよう。では、『自由論』はどのようなスタイルを持つと言えるであろうか。その文体は幾分速く、勢いがあふれ、かつ、「かなり息の長い、こみ入った文体」で書かれている。無論、それ自体は特徴ではあっても根本性格とは言えないであろう。だが、この、いわば一見些細な特徴こそ、われわれの見方によれば、この著作の根本的な特徴を示唆しているのである。

4 自由における対話

以上のような形式、文体への注目からすれば、『自由論』における次の言葉は、極めて興味深いものとなってくる。

「現在の著作『自由論』においては、たとえ対話という外的形式はないにせよ、しかし全ては対話のように成立しているのであるが(alles wie gesprächsweise entsteht) 著者は、ここでも採った行き方を、将来的にもまた保持するだろう。」(S.46, VII, 410, Fn. 2)

『哲学と宗教』序文では、「手段として役立つというのではなく、それ自身の内に価値を有している」(VI, 13)とまで評価していた「対話(篇)」を、ここでシェリングは、「外的形式」と呼んでいる。何がそうさせたのであろうか。

「外的形式」というものはあり得ても、「外的内容」などあり得ない。著作にとって形式と内容それぞれが持つ意味は異なる。しかし、形式が

「外的」であると言われるとすれば、それは内容と無関係であるからであらう。だが、形式は一旦成立すれば、内容と無関係であるに留まらず、内容そのものを規制することになる。「神的」と呼べる著作があるとするれば、形式と内容は不可分の統一を持ち得みようが、われわれにあっては「形式」はあたかも『自由論』における根底(Grund)の如く独立して働き、著作の中心から逸れて著作にとっての悪、即ち破綻をもたらしかねない実在的な質料性を持つ。そうした破綻の一例が『叙述』である。しかし、『哲学と宗教』のシェリングにとって「対話」とは、「自立」にまで形成を遂げた哲学が独立で自由な精神において取り得る唯一の形式(Vf. 13)であつたから、対話篇は、形式であるとは言え、本来は自由を保証するものでなければならぬはずである。それが「外的」であると言われるのは、ここ『自由論』においては、もはや形式としての対話ではなく、まさしく対話そのものが重要になつていくということに他ならない。「全てが対話的に成立している」と言つ以上、その対話的有りは『自由論』にとって内的・本質的であり、著作の「成り立ち」そのものであり、しかも、この著作の「全て」に関わるものである。更にシェリングはこの有り様に自覚的であるばかりではなく、それを将来に涉つて選り取る決意を示している。だとすれば、この対話性において『自由論』を読むことこそ、シェリング自身が、そして『自由論』という著作そのものがわれわれに要求している読み方であることになる。シェリングのこの言葉に注目しているのはわれわれだけではない。プッフハイムは、『自由論』の方法上の特殊性^⑤を論じた部分でこの箇所を引き、「対話的な成立」の意味を、「一般に抱かれる問いを、自由でありながら、絶えず追跡すること」であり、しかもそこには「単線的でコルセットの嵌った証明形式の代りに、種々の側面から常に新しく生じてくる刺激の組み込み」が行われていると理解している。この着目は正當

であらう。『自由論』の文体が「かなり息の長い、こみ入った」ものであるのは、こうした対話性が文体にまで反映したからこそである。『自由論』においては、ただ一つの文の中に、幾つの反論とそれへの答えが、そのために情け余りて言葉足らずの感はあるものの、したがって、しばしば「飛躍」を指摘されるものの、込められていることか。『自由論』の文体は、開かれるべき「対話」の無数の襞を織り込んだものである。

しかし、問題はその刺激、反論がどこから来るものであるのか、つまり、「対話」が何との、ないし誰との対話なのか、ということである。すぐさま思い起こされるのは、ヤコービやシュレーゲル、あるいはヘーゲルの名であらう。なるほど、上掲引用を含む注で取り上げられているのがシュレーゲルの書評文である以上、少なくともシュレーゲルを念頭に置いたものと考えてるのが妥当であるように見える。あるいは、プッフハイムが特に注意深く明らかにしているように、エティンガー、バーダーやシューベルトといった神秘主義に属する人々の刺激も挙げられよう。しかし、ことはそれほど単純ではない。

まず、上掲引用を含む、長い脚注の全体に注目しよう。そこでは、シュレーゲルの書評文を枕に、ドイツ思想界に「ペテン(Schwindel)」が蔓延していることへの嘆きが語られ、慰めになるのは精々、それに自分が関わつておらず、エラスムスの言葉「私は常に独りでありたかつたし、盟約者や徒党を組む者達以上に私の憎むものはない」と言い得るという自覚があることだ、と言われた後、更に次のように続く。

「著者は一党派の設立によって他人から、とりわけても自分自身から探究の自由を取り上げようとしたことはない。著者は、自身が常にその自由のなかにあるものと明言したし、また、おそらくはいつまでもそこにあることを明言するだろう。」

この直後に、上掲引用が続くのである。この異様さは何であろう。あらゆる党派性への拒否^⑧と、対話の宣言。この二つのものは果たして直接に結び付くであろうか。両者を結び付けているものがあるとすれば、それは唯一「自由」である。だが、その自由とは、同じ注の後半で述べられていることからすれば、驚くべき自由である。シェリングは言う。この著作はより明確に、誤解を生まないように書くこともできたが、それを敢えてしなかった。これで誤解する者は去るがよい。「呼びもしない追隨者達や反対者達」は、『哲学と宗教』を黙殺したように、この著作『自由論』をも黙殺するがよい。

ここにあるのは、「対話」というよりも、一切の拒絶であるかのように見える。少なくとも、シェリングがここで言う「対話」は、ある党派(Sekte)に属する自分が、別の陣営の者と対話することではあり得ない。だが、この注の異様な書き振りがここですれば、むしろ、実は、それらへの拒絶から生じる孤独こそ、シェリングがここで「自由」と呼んでいるものの、自身が常にどこまでもそこにあり続けると言われる、それ自体異様な「自由」に他ならない。ブッフハイムはこの箇所への注において正當にも、自由に関する論究が、それ自身「自由な行為(freier Akt)」として行われなければならないことを指摘し、しかしまた、だからといって『自由論』はレトリックに頼った、十分に練られていない作品だと見ることは出来ない^⑨と注意している。ただ、この「自由な形式は、シェリング自身の初期の同一性体系の實在的部門における幾何学的な方法との明確な対比の上に立つ」というもつともな指摘は、それだけでは単なる図式に留まるう。ここでは既に形式は問題ではない。『自由論』における「対話」は形式ではないからである。それにもかかわらず「対話」が重要であり「自由」が問題になるのは、峻厳な拒絶による孤独な自由においてこそ「対話」が成り立つ。言葉が沈黙において成り立つよう

に^⑩ 故にである。

このことから読み取れるのは、この「対話」が形式でなければかりではなく、渡辺がブッフハイムを批判しながら強調しているように、単に外的な刺激とそれへの反応として理解されるようなものではない、ということである。シェリングの「対話」は、一面では『自由論』の成立した状況や環境を示しているとともに、シェリングにとって内面化されたもののなであり、その意味で「対話」として『自由論』を読むのならば、『自由論』をその外部へと開くことと同時に、それによって『自由論』そのものが開いている新たな地平が明らかになるのであればならない。テキストに戻る。この箇所は、明らかに、同じく厳しい拒絶の態度を見せている序言末尾の文言(VII, 335)と呼応している。シェリングはそこで幾つかの希望を語っている。その一つは、「共同する努力の精神が更になお自らを強化し、あまりにもしばしばドイツ人を支配する党派精神(Sektenggeist)が、認識と見解の獲得を邪魔しないように」という希望である。これは「希望」である以上に皮肉でもあり、ここには党派性への明らかな嫌悪がある。これに先立つもう一つの希望は、シェリングに向けた攻撃を行って来た者達も、シェリング自身がそうしているように、意見を明確に表明して欲しいということである。ここには、論争を受けて立つという宣言があるかに見える。しかし、その希望を語る中でシェリングは、「しかしながら、論争という作爲的な捻れた進み方(die künstlichen Schraubengänge der Polemik)^⑪は、哲学の形式に相応しいものではあり得ない」と述べるのである。敢えてパラフレーズするなら、シェリングが本当に望んでいるのは、陰で行われている批判が止むことに過ぎない。

これらの点を考えるなら、『自由論』は論争のための書ではない^⑫。それは党派に属する類のものではないし、党派的な他者を攻撃するための

ものではない。そこに攻撃的な言葉が見られるとしても、それは精々、党派的な者達を排除するためのものである。だとすればわれわれは『自由論』を、例えばヤコービやシュレーゲルとの論争においてだけ読むことはできない。少なくともシェリング自身の意図においては、である。むしろ『自由論』の孤独を認め、自由へと解き放たなければならぬ。そして、しかし逆説的に言えば、それによってこそ、『自由論』は一つの対話篇となるだろうし、論争に解消されないような「対話」においてシェリング自身が希望していた精神の共通を見出すことが出来るのではないか。

結 び

思想は言葉とならなければならない。だが言葉は、それを定着する筆記具から始まり、執筆の時間、思索家の身体的・精神的状況、歴史的背景によってこそ現実的なものとなる。そもそもわれわれの語る言葉そのものが、ここに初めて無から生まれるものではなく、われわれは常に他者の言葉を語る。だとすればこれらの、いわば質料・物質的な、レアルな条件は思想にとって「外的」なものだろうか。しかし、一方において思想はその核において、それが「意味」を持つことにおいて、イデアールなものでなければならぬ。その時、言葉は彼自身のものとなり、彼はそこにおいて自由であるだろう。

われわれは『自由論』を一つの「対話」として見ようとする。それは、歴史的な背景や、あるいは「論争」を、それらが「外的」なものである限り排除しようとするのである。だが、レアルなものは、内面化されることによって、むしろ必然的な条件となる。われわれが対話の観点に立とうとするのは、レアルなものを排除するためではなく、むしろ、

それらを「対話」において、しかも重層的な対話において見るためである。その意味では、『自由論』はシェリングの諸著作の中でも際だって豊かな、ふくよかさを持つように思われる。実際、『自由論』には、遠く、近くからの多数の声が響いている。われわれが先に「ヴェルトアルター」との関係やヤコービとの関係を強調することを問題としたのは、そうした文脈を抹消するためではなく、『自由論』が持つこうした多声的な豊かさを取り戻すためである。シェリング自身の過去の思想との対話（最初期思想、自然哲学、同一哲学、直近で主題において共通する『哲学と宗教』との関係）、同時代思潮とのあからさまな（シュレーゲルらとの）、あるいは沈黙における（ヘーゲル、エッティンガーらとの）対話、それらは「対話」の内実として、『自由論』、そして自由そのものを本質的・必然的に成り立たせているものである^{④7}。しかし、それだけであるなら、「論争」を「対話」と言い換えただけにすぎず、『自由論』を「対話」として読む意味は小さい。むしろ、『自由論』の「対話」にとって重要なのは、哲学史との、顕示的な（プラトン、アウグスティヌス、スピノザ、ライプニッツらと）、また暗示的な（アリストテレス、バームらとの）対話である^{④8}。これによってわれわれは、『自由論』を「ドイツ観念論」という枠組みからかなり解放することができるのではないかと思う。更には、『自由論』のシェリングが知らなかった、むしろわれわれによってこそ可能なる対話として、中・後期シェリングとの対話、ドイツ観念論以降の哲学・思想との対話が考えられる。そして何より、そこにおいてわれわれ自身と『自由論』との対話が成立しなければならぬ^{④9}。

ただし、その「対話」は、形式としての「論争」ではないとしても、それ故に徹底的なものだと考えることはできない^{④9}。その「対話」が上のような孤独において、拒否の姿勢において現れて来るとき、それはペーツの言うのとは些か趣は異なっても、確かに「一つの挑発^{④9}」となる。つ

『自由論』は、シェリングにとっての根本原理であった「収縮と拡張」を体现したものと見え、それは自由のために自己自身へと集中し、他者への拒否に至ると同時に、それを通じてこそ、そのした我性を乗り越えた普遍性へと至るものとしてあるかのようである。そのことを「対話」として、シェリングが確保しようとして孤絶を排した自由における「対話」として捉えようとする以上、そしてその対話が一つの生命を持つなら、その対話があるのみ、この必然である。

一次文献・注釈・翻訳

- (1) シェリングの基本テキスト（巻数（ローマ数字）と頁数（アラビア数字）を示す）

F. W. J. Schelling sämtliche Werke, hrsg. von K. F.A. Schelling, 1856-61.

Plett, G. L.(Hg.), Aus Schellings Leben. In Briefen, 1869-1870, ND. 2003, Olms[Plett].

Fuhrmans, H.(Hg.), Briefe und Dokumente, Bde. II, 1762/73/75[BuD]. 刊行中の次の批判版全集にはまだ『自由論』は収められていないが、初期著作、書簡に関しては参照した。

Hitorisch-kritische Gesamtausgabe, im Auftrag der Schelling-Kommission der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, hrsg. von H. M. Baumgartner, W. G. Jacobs und H. Krings, 1976-[AA]

- (2) 『自由論』の注釈付き刊本・翻訳

岡谷弘治訳『人間の自由の本質』岩波文庫、一九五一年。

F. W. J. Schelling, Über das Wesen der menschlichen Freiheit, hrsg. mit Einl. und Anm. von Fuhrmans, H., 1964, Reclam.

渡邊二郎訳『人間の自由の本質』中公パックス・世界の名著、一九八〇年。

F. W. J. Schelling, Über das Wesen der menschlichen Freiheit, hrsg. mit Einl. und Anm. von Buchheim, T., 1997, Felix Meiner, Ph. B.

- (3) 『自由論』の「ヴェルハイメルター」関係の比較的新しい資料

F.W.J. Schelling, System der Weltalter : Münchener Vorlesung 1827/28 in einer Nachschrift von Lasaulx, E. von, hrsg. von Peetz, S., 1990, Vittorio Klostermann.

F.W.J. Schelling, Philosophische Entwürfe und Tagebücher, Bd. 1, 2, hrsg. von Knatz, L., Sandkühler, H. J. und Schraven M. 1994, 2002, Felix Meiner [Jahreskalender=Bd. 1]

F.W.J. Schelling, Weltalter-Fragmente, hrsg. von Grotsch, Klaus, mit einer Einleitung von Wilhelm Schmidt-Biggemann (Schellingiana, Bd. 13), 2002, Frommann-Holzboog.

二次文献（著者アルファベット順）

Baumgartner, Hans Michael (Hrsg.), Schelling. Einführung in seine Philosophie, 1975, Karl Alber. (バウヴァルトナー編（岩波訳）『シェリングの哲学入門』早稲田大学出版部、一九九七年）

Baumgartner, Hans Michael und Jacobs, Wilhelm G.(Hrsg.), Schellings Weg zur Freiheitsschrift. Legende und Wirklichkeit. Akten der Fachtagung der Internationalen Schelling-Gesellschaft 1992 (Schellingiana Bd. 5), 1996, Frommann-Holzboog.

Bollnow, Otto, Friedrich, F., Die Lebensphilosophie F. H. Jacobis, 1933, Nachdruck, 1966, Kohlhammer.

Brown, Robert F., Is Much of Schellings Freiheitsschrift Already Present in His Philosophie und Religion, in: Baumgartner und Jacobs (Hg.), 1996.

Brüggen, Michael, Jacobi, Schelling, Hegel, in : Hammacher (Hg.), 1971.

Buchheim, Thomas, Das Prinzip des Grundes und Schellings Weg zur Freiheitsschrift, in: Baumgartner und Jacobs (Hrsg.), 1996.

Buchheim, Thomas, Zwischen Phänomenologie des Geistes und Vermögen zum Bösen: Schellings Reaktion auf das Debüt von Hegels System, in: Archiv für Geschichte der Philosophie, Bd. 85, Heft 3, 2003, Walter de Gruyter.

- Fischer, Kuno, Schellings Leben, Werke und Lehre (Geschichte der neuern Philosophie, Bd. 7), 4te Auflage, 1923 Karl Winters, Nachdruck, 1973, Kraus Reprint.
- Fuhrmans, Horst, Schellings Philosophie der Weltalter. Schellings Philosophie in den Jahren 1806-1821. Zum Problem des Schellingschen Theismus, 1954, L. Schwann.
- Fuhrmans, Horst, Einleitung und Anmerkungen zur Freiheitsschrift der Reclam-Ausgabe, 1964.
- 藤田正勝「ヘーゲルの『精神現象学』とシェリングの『自由論』」高山由・藤田正勝編『シェリングとヘーゲル』（シェリング論集 1）晃洋書房一九九五年所収。
- Gulysga, Arsenij, Schelling. Leben und Werk, übertragen von Elke Kirsten, 1989, Deutsche Verlags Anstalt.
- バーン・エルケ（松山寿一訳）「後期哲学への移行 シェリングの///」ンケン『哲学序説』大阪学院大学『人文自然論叢』四九号 二〇〇四年。
- （Hahn, Elke, Schellings Münchner Einleitung in die Philosophie als Übergang zur Spätphilosophie).
- Hammacher, Klaus (Hg.), Friedrich Heirich Jacobi. Philosoph und Literat der Goethezeit, Beiträge einer Tagung in Düsseldorf (16.-19. 10. 1969) aus Anlass seines 150. Todestages und Berichte, in: Studien zur Philosophie und Literatur des neunzehnten Jahrhunderts, Bd. 11, 1971.
- Hegel, Theorie-Werkausgabe hrsg. von Moldenhauer, E. und Michel, K. M., 1969-71, Suhrkamp.
- Heidegger, Martin, Schellings Abhandlung über das Wesen der menschlichen Freiheit (1809), hrsg. von Feick, H., 1971, Max Niemeyer.
- （ハインリッヒ（木田・迫田訳）『シェリング講義』新書館 一九九九年）
- Hemigfeld, Jochem, Friedrich Wilhelm Joseph Schellings > Philosophische Untersuchungen über das Wesen der menschlichen Freiheit und die damit Zusammenhängen Gegenstände<, 2001, Wissenschaftliche Buchgesellschaft.

一〇

- 平尾昌宏「形式・体系・自然 シェリング『叙述』とスピノザ『エチカ』」松山寿一・加國尚志編『シェリング自然哲学への誘い』（シェリング論集 4）晃洋書房 二〇〇四年所収。
- Höffe, Otfried und Pieper, Annemarie(Hrsg.), Schelling. Über das Wesen der menschlichen Freiheit, 1995, Akademie Verlag (Klassiker Auslegen, Bd. 3).
- Hogrebe, Wolfram, Prädikation und Genesis. Metaphysik als Fundamentaltheuristik im Ausgang von Schellings "Die Weltalter", 1989, Suhrkamp.
- 北沢恒人「近代的個人の存立根拠 シェリング『自由論』における光と闇の原理」永井他編『物象化と近代主体』創論社 一九九一年所収。
- Knatz, L., Schellings Freiheitsschrift und ihre Quellen, in: Baumgartner, Hans Michael und Jacobs, Wilhelm G. (Hrsg.), Philosophie der Subjektivität?, Zur Bestimmung des neuzeitlichen Philosophierens, Akten des 1. Kongresses der Internationalen Schelling-Gesellschaft 1989, Bd. 2(Schellingiana, Bd. 3. 2), 1993, Frommann-Holzboog.
- 久保陽一「シェリングとヤコーブ 有限者と無限者の連関をめぐって」『理想』六十四号 二〇〇五年。
- 工藤喜作「ヤコーブにおける直接知としての信仰」神奈川大学人文学会『人文研究』七一号 一九七八年。
- 松山寿一『科学・芸術・神話 自然哲学のアクチュアリナイ』晃洋書房 一九九四年。
- 松山寿一「スピノチストとしてのシェリング」大阪学院大学『人文自然論叢』三三・三四号 一九九六年。
- 神子上恵群「F・H・ヤコーブの『哲学』」『龍谷大学論集』三九四号 一九七〇年。
- 神子上恵群「知ある無知 ヤコーブとシェリングの場合」『龍谷大学論集』四一七号 一九八〇年。
- 森哲郎「シェリング『自由論』再考 自由と『地』の世界」『基督教学研究』八・九号 一九八五・一九八六年。
- 長島隆「存在と虚無 ヤコーブとシェリングの論争」『西川富雄監修

『シェリング読本』法政大学出版局、一九九四年所収。

Oesterreich, Peter Lothar, Schellings Weltalter und die ausstehende Vollendung des deutschen Idealismus, in: Zeitschrift für philosophische Forschung, Bd. 39, 1985.

Oesterreich, Peter Lothar, Geschichtsphilosophie und historische Kunst. Zum mythosnahen Sprachstil der Weltalter Schellings, in: Sandkühler, H. J. (Hrsg.), Weltalter — Schelling in Kontext der Geschichtsphilosophie, 1996[Dialektik 1996/2], Meiner.

Oesterreich, Peter Lothar, Die Rhetorik des Systems, in: Danz, Chr., Dierksmeier, C. und Seysen, Chr. (Hrsg.), System als Wirklichkeit. 200 Jahre Schellings "System des transzendentalen Idealismus (Kritisches Jahrbuch der Philosophie, Bd. 6), 2001, Königshausen & Neumann.

Oesterreich, Peter Lothar, "Der umgekehrte Gott". Augustinus' Einfluß auf Schellings Rede vom Bösen, in: Adolphi, R. und Jantzen, J. (Hrsg.), Das antike Denken in der Philosophie Schellings (Schellingiana, Bd. 11), 2004, Frommann-Holzboog.

大浦康介「イエナ派と近代 初期ロマン派に見る 組織化 の黎明」京都大学人文科学研究所『人文学報』八四号、二〇〇一年。

Peetz, Siebert, Die Freiheit im Wissen. Eine Untersuchung zur Schellings Konzept der Rationalität, 1995, Vittorio Klostermann.

酒田健一「森田氏の『プロトメトウス シェリング』『自由論』について」『シレーゲル』後掲『モデルネの翳り』一九九九年所収。
酒田健一「芸術哲学への途上」『シレーゲル・シェリング』その二シリーズ
ニコ・シレーゲル』『早稲田大学大学院文学研究科紀要』四五号、二〇〇〇年。

菅原潤『シェリング哲学の逆説 神話と自由の間』北樹出版、二〇〇一年。

高尾由子『シェリングの自由論』北樹出版、二〇〇五年。

Tillette, Xavier, Die Freiheitsschrift, in: Baumgartner (Hrsg.), 1975. (ハイリヒト (松山寿一訳)『自由論』上掲『シェリング哲学入門』所収)

辻村公一「シェリング・無底 『自由論』に於ける」同著『ドイツ観念論断想』創文社、一九九三年所収。

山口和子『未完の物語 シェリングの神話論をめぐる』晃洋書房、一九九六年。

山口和子『後期シェリングと神話』晃洋書房、二〇〇四年。

山口誠一「物語としてのドイツ観念論 後期シェリングのヤービー論を中心に」『哲学会編』ドイツ観念論再考』有斐閣、二〇〇四年。

山本清幸『積極哲学への回帰 バアダーとシェリング』九州大学出版会、一九八三年。

渡辺二郎・山口和子編『モデルネの翳り シェリング『自由論』の現在』(シェリング論集 3)晃洋書房、一九九九年。

渡辺二郎『自由論』によつて開かれた地平』上掲『モデルネの翳り』所収。

注

① 西谷 三風

② Fischer, S. 149.

③ Heidegger, S. 2. (邦訳、一五頁)

④ Hegel, Werke, Bd. 20, S. 453.

⑤ ケーゲルの評語を収める『自由論』の初期の受容については Buchheim, 1997, XXXIII-XXXVIII参照。

⑥ 例えて、森 六三 四頁。

⑦ Fuhrmans, 1964, Anmerkungenに『自由論』のこれらの箇所を、後述におけるこれらの着想を「暗示する (andenten)」について語法を用いる。

⑧ Tillette, S. 96. (邦訳、九六頁)

⑨ 文献表参照。上記のPhilosophische Entwürfe und Tagebücherの第一巻は『自由論』執筆時の状況をよく示している。その簡潔な整理は Knatz, S. 469-472参照。

⑩ 実際、高尾(序文)が言及している『自由論』の研究は近年少ない。最近のものをいくつか、編集したBaumgartner und Jacobs編の『Höffe und Pieper編のもの』渡辺・山口編のものがあるが、単著としては

Hennigfeldの解説書が挙がるくらいである。高尾も、『哲学と宗教』から「シニシットガルト私講義」までを広く視野においたシェリングの「自由論期」に関する研究である。

- ⑪ 例えば、Tillette, S. 96 (邦訳、九六頁)、Buchheim, 1997, S. 168を参照。
 ⑫ 『自由論』からの出典指示には、各種刊本・翻訳との照合を容易にするため、段落番号を添えた(S.で示す)。

⑬ Fuhrmans, 1954.

⑭ 辻村、一四七頁。

⑮ Heidegger, S. 4, 194 (邦訳、一七、二六〇 一頁)、Fuhrmans, 1964, S. 33; Tillette, S. 106-107. (邦訳、一〇六 一〇七頁)

⑯ この点は一八〇九年の著作集序文冒頭に明らかに表われているが、以降の刊本はその部分を削除してきた。これを復活させたPh. B.版の意義は大きい。

⑰ 北沢やBuchheim, 1996を参照。

⑱ この点、高尾の他、Brownがやや図式的だが明解。ただ、Brownも『自由論』を成功した著作とは見ていない。

⑲ 『自由論』とそれ以降のシェリングの思索との関係について、最近ではハーンが、『自由論』を「観念的部門」、「ヴェルトアルター」を「実在的部門」と見なすことで(四七頁)、両者を一つの組として捉える観点を提示している。この図式の展開によってハーンは、広く後期哲学までを視野に収め、積極/消極哲学の成立もこの観点と関わらせている(五三 五五頁)。興味深い捉え方であるが、われわれは幾つかの理由から、ここではこうした観点は採らない。第一に、この観点の追求では考察すべきテキストの範囲が大幅に広がってしまうからである。しかしこれは単なる技術的なレベルの問題に過ぎない。第二は、『自由論』をそれ以降のシェリングの思索の一部として読むことは、『自由論』の独立性を剥奪しかねない危険がある上に(これが本稿の基本的な論点の一つであった)、「ヴェルトアルター」だけならまだしも、いわゆる積極哲学の時期まで観点を延長することは、時間的な距離が遠すぎることである。そのため、実際この論文におけるハーンは、当然のことながら、『自由論』固有の課題(例えば悪の問題)については考察を意図的に割愛している

(四七頁参照)。第三には、なるほど『自由論』が哲学の観念的部門に関するものであることはシェリング自身の序文にも明らかであるが(VII, 333-334)、しかし、シェリングの場合常にそうであるように、観念的なものは実在的なものを、実在的なものは観念的なものを含んでおり、実際『自由論』でも実在論の要素ないし自然哲学が決定的な役割を果たしていることを考えれば、『自由論』に一つの完結性を与えることは不自然ではないからである。更に、これはハーン自身の問題ではないが、次のような疑問も浮かぶことは指摘しておかなければならない。『自由論』末尾(S49)では、一連の論文が予告されており、「そのなかで哲学の観念的な部門の全体が次第に叙述されるだろう」と言われている。多くの論者が認めているように、ここで予告されているのが「ヴェルトアルター」であるとすれば、「ヴェルトアルター」が実在的な部門を成すというハーンの基本的な想定は否定されることになるし、逆にハーンの想定が正しいければ、ここで予告されているのは「ヴェルトアルター」には当たらないということになる。

⑳ Buchheim, 1997, XIII-XXV.

㉑ 実際ヤコービの思想は、主としてカントやフィヒテ、ヘーゲルらとの関係において取り上げられてきたものの、それ独自の意義についてはさほど注意が払われて来なかった。Bollnowの学位論文はそうした傾向に一石を投ずるものであったが、Bollnowに捧げられたHammacher編の論集においても、Brüggem論文(後掲)を含めその思想を取り上げた第一部(第二部は文学)でも、取り上げられているのはヤコービへのノからの影響関係である。日本でもヤコービが取り上げられるのは、多くの場合ヘーゲルとの関連においてであるが、神子山、一九七〇年がヤコービの哲学それ自体を取り上げている他、スピノザ研究者として知られる工藤も、スピノザ主義との関連からヤコービの研究を進め、ヤコービの思想を独自のものとして評価している(文献表に挙げたもの以外にも神子山と工藤にはヤコービ関係の論文が多い)。

㉒ 例えば後掲ヘーゲル宛書簡。

㉓ 例えば、Fischer, S. 153-160, 672-680.

㉔ 日本でもここ数年、この傾向は目立つ。後に触れる久保の他、上記の

論争をフォローした長島、ヤコビに注目することによってドイツ観念論という「物語」の相対化を語る山口誠一の各論文がある。

- ²⁵ Brüngenはシェリングとヤコビとの関係の外面的歴史的経過、両者の哲学的な相違点について論じており、コンパクトだが参考になる。ヤコビによる、自然と超自然的なものとの区別の強調、対するシェリングの同一性概念、前者による後者の批判が簡潔にまとめられ、シェリングの同一性概念が生成・発展の契機を導入するようになったのは、ヤコビによるものだとする。この観点から、Fuhrmansの、シェリングの哲学はヤコビと対決したものではないとする見解が批判される(Fuhrmansについては後注を参照)。久保もヤコビとシェリングとの論争における「有限者と無限者の関係」について簡潔で要を得た整理を行い、とりわけ『自由論』以降の変化をシェリングのヤコビへの接近として見ている。なお、神子上、一九八〇年もヤコビとシェリングの関係を取り上げているが、一八二二年以降の両者が中心であり、シェリングについては「エアランゲン講義」が取り上げられている。

²⁶ Peetz, S. 12-13.

- ²⁷ もっとも、最近でもHennigfeldは汎神論論争との関係でヤコビに触れるにとどめ、高尾はヤコビには全く言及していない。両者とも、哲学的な関連には禁欲的である(後述)。

- ²⁸ 例えばFuhrmansは『自由論』を本質的な意味で対シュレーゲルのものであるとする。Fuhrmans, 1964, S. 139, 141, Fuhrmans, 1954, S. 166-172, etc. 日本ではフアマンズを受けて、山本がこの点を強調している(五九、六一頁)。それとは別に、若き日々から『自由論』に至るまでの時期におけるシュレーゲル、シェリングの関係を、特に両者のスピノザ主義との関係から描き出した酒田、一九九九年は大変興味深い。同じく酒田、二〇〇〇年も参考になる。

- ²⁹ ただし、フィヒテ及びカント言及とシュレーゲル言及には違いがある。前者は本文中でなされるのに対し、後者は注においてである。シェリングにとってフィヒテはカントと共に既に過去に属していたのであろうか。
³⁰ この点についてはGulyga, S. 240, 藤田及びBuchheim, 2003を参照。
³¹ Pitt, I, S. 74, AA, Reihe III, Briefe 1, S. 17.

- ³² ただし、叙述の「失敗」と内容の「失敗」とはまた別であり、『叙述』はむしろシェリング自身の独自のものとして評価すべきであろう。なお、『叙述』の形式については平尾、四一、四四、五八、五九頁参照。

- ³³ これら初期著作の歴史的なコンテキストを論じた松山、一九九六年が参考になる。

- ³⁴ Oesterreich, 1986を参照。なお、神話論の観点から『自由論』を読む山口和子、一九九六年は『自由論』の芸術的な表現を指摘し、Oesterreich, 1985, Jantzenらも参照指示している(一五九頁)。しかしまた、山口和子、二〇〇四年では、Oesterreich, 2001についてはあるが、Oesterreichは思想内容よりも表現形式により注目しているとしている(二二三、四頁)。表現形式と思想内容との連関はそれ自体難しい問題であるが、われわれがここで取り上げる「対話」は、表現形式(文体、レトリック)と言つに当らない。シェリングの文体やレトリックを論じる資格は私にはないが、詩的な表現、神話的な表現と、「対話」形式とは矛盾するものではない。

³⁵ 渡邊、凡例五。

- ³⁶ Oesterreich, 2004がこの箇所を引き、そこに「ヴェルトアルター」の叙事詩的語りの先駆けを見、また、アウグスティヌスの語り口と重ね合わせている(S. 486)が、これは一考を要する。

³⁷ Buchheim, 1997, XXVI-XXVII.

- ³⁸ ただつづいた態度は『自由論』ばかりではなく、シェリングの著作の序文、緒言に多く見られる。

³⁹ Buchheim, 1997, S. 164.

⁴⁰ この点、森は示唆的である(特に一〇七頁参照)。

- ⁴¹ 渡辺、一九九九年は、フフハイムの注釈の有益さを認めながらも、それが結局はシェリングの独自性の「撲殺」となることを危惧している(三七、三八頁)。そのため渡辺は『自由論』を「対話」として読むことに批判的であるが、われわれが『自由論』を「対話」として読むとするのは、既に述べたように、実は渡辺と同じ危惧から出発するが故にである。しかし、そのためには「対話」的読解が『自由論』の内面を明らかにするものでなければならぬ。

④② 『自由論』を脱稿したのが四月一日であり、以下に見る序文はこの日から翌二日にかけて書かれている（*Jahreskalender*, S. 16）。現行テキストでは序文の日付けは三月三日となっているが、恐らく最初三日に書いたものを書き直したものである（この点 Buchheim, 1997の注を参照）。だとすれば、本文、特にわれわれの取り上げた注を含む部分を書き上げた後、その延長で序文を書き直したのではないかとの推測は可能であり、われわれの読解に適合する。

④③ 『自由論』脱稿後の四月二八日付けシュレーベルト宛書簡で、これとほぼ同じ「彼の作法的で螺旋式の論難（*seiner künstlichen und auf Schrauben gesetzten Polemik*）」（*Bud*, III, 597）という表現をシュレーベルに対して用いているから、『自由論』序文のこの箇所はシュレーベルを念頭においたものと考えられよう。

④④ 本文（S. 46, VII, 410）でも、シュレーベルの「論難の虚しさ（*die Eitelkeit einer Polemik*）」が指摘され、実にこの言葉は二度繰り返されている。それが、結果的に相争つ論争となってしまう感じは拭えないにしても、実際、シェリングの口調も、あるいはシュレーベルの辛辣さが乗り移ったかのように見える場合もある。

④⑤ こうした共同は、初期ロマン派の求めたものでもあった。フリードリヒ・シュレーベルの「共同哲学」、「共同文学」の理念、しかもそれは、なれ合いや共感ではなく、対立、葛藤を含むものとしての、はその証である。この点については大浦を参照（特に八 一二頁）。

④⑥ Hennigfeldは、『自由論』が概念・論理的な議論、聖書や神学の参照、神秘学・神智学的な語り方、詩的なメタファーの使用というように、異種混合的な叙述方法をとっているがゆえに、読解が困難になっているとする（S. 15）。われわれはこの点については賛成できる。しかし同時に、Hennigfeld自身の読解はいつした点に抗して、『自由論』を何よりも哲学的な体系企図として読むべきである（*ebd.*）。更にまたHennigfeldは、自由と体系は両立しないという「古いが、決して消え去っていない言い方」（S. 1）というのはヤコービの主張を指すのだとするFuhmannの見解に触れつつ、より重要なことは、シェリングの問題提起の体系的な解明であって、この問題は特定の人名に結び付くものではない、として

いる（S. 35）。つまり、Hennigfeldはテキスト内在的な解釈を志向するのである。しかし、シェリングの汎神論概念の吟味の箇所への注釈としてはヤコービ以来の汎神論論争についての歴史的な説明を援用しており（S. 37-46）、「貫性を欠く。われわれは、『自由論』の体系的解釈への志向そのものは何よりも重要だと考えるが、同時に、われわれ自身は単純にテキスト内在主義を採らない。Hennigfeldが「異種混合的な叙述方法」と考えているものは、シェリングの対話の相手が多種多様であったということの意味するのであって、それらの一見すると外的に見える要素が『自由論』にとっては、「対話」においてもはや内的な要素となっているのだと見なす。

④⑦ 松山、一九九四年はシェリング自然哲学を当時の自然科学、自然哲学からシェリングがいかに多くを吸収しているかを具体的に実証し、テキストのポリフォニー的性格を詳細に示しているが、それは『自由論』にも言えるばかりか、『自由論』ではその多声性が内的対話にまで昇華されているように思われる。

④⑧ これら先行思想について、『自由論』の研究者たちの言及は極めて貧しい。特にアウグスティヌス及びライプニッツに関しては、彼らの「悪＝欠如理論」がシェリングによって乗り越えられたとする単純な議論が継承され続けているのみであるように思われる（例えばFuhmanns, *Einleitung*, 1984）。詳論は他日を期するが、それだけではシェリング自身の悪概念の明確化にとっても不十分ではないかという疑問を呈しておく。

④⑨ 山口誠一の表現に従って言えば、ドイツ観念論という「物語」からの解放であると言つてよい。

⑤⑩ 例えば菅原（第三章）がHogrebeを援用しながら、「ヴェルトアルター」から『自由論』の難解箇所を読んでいる（後者を前者に還元するのではなく）のは参考になる。

⑤⑪ 無論、これらの歴史的な文脈を持つ複合的な「対話」を、全て一律に論じることはできない。まして、『自由論』とわれわれとの「対話」には全く異なる次元の研究を要することは言つてもよい。

⑤⑫ Gulygaの見解では、シェリングの対シュレーベル論難は「友好的なトーン」で行われているという（S. 237）。実際シェリングは『自由論』を

含む著作集が印刷された後、これをシュレーゲルやヤコービらにも送っている（Jahreskalender, S. 24-25）。しかし、これに対してKratzが、なるほどシュレーゲルの人格に対しては友好的であっても、事柄においては辛辣であって宥和的でないとしているのは正当である（S. 477）。ただ、われわれはそうした辛辣さをも含めて「対話」と見る。

⑤③ Peetz, S. 83.

（本学文学部非常勤講師）

付記：この研究は、大阪学院大学の研究助成（平成十七年度）による成果の一部である。記して感謝申し上げます。